

[JRに運休や遅れ](#)

イザベラ・バード秋田の旅（5）秋田編・上

2018年5月27日 掲載



「日本奥地紀行」でイザベラ・バードが、「どの日本の町より気に入っている」と書いたのは、横浜でも東京でもなく、東北の旧城下町・久保田（現秋田市）だった。とりわけ強調したのはこの町が「日本的」だということ。140年前、バードはどんな光景を見たのだろうか。



バードが秋田入りしたのは1878（明治11）年7月22日。最初に訪れたのは茶町（現大町）とされる。町人が住む外町（とまち）の中心部で、バードが投宿先に選ぶような大きな宿があった。翌日からは秋田県師範学校、秋田病院、絹織物工場（県営機業場）などを精力的に訪問。明治に入って整備された施設で、多くは内町の三郭（さんのくるわ、現中通）にあった。かつて佐竹家一族や上級武士が屋敷を構えた区画だ。

バードが訪れた当時の町並みが分かる絵や写真は残っていない。しかし10年前の戊辰戦争を免れた秋田は、藩政時代からの景観が保たれていたとみられる。建築史研究家の五十嵐典彦さん（秋田市）は「内町と外町では屋敷の造りが全く違っていたが、それぞれ一定のルールに従って整備されていた」とする。

板葺（ぶ）き屋根で妻入り形式の町家が通りに面して並んでいた外町。一方、内町の三郭は板塀に囲まれた広大な屋敷町。各屋敷の正面には長屋門や薬医門、邸内には緑豊かな庭園があった。「伝統的で統一的な景観に、日本的な美しさを感じたのでは」と五十嵐さん。

反対に「雑然としている」と、バードが辛口の評価をした町がある。当時の日本の玄関口だった横浜だ。「一紀行」によると、外国人居留地はさまざまな外観の西洋建築が立ち並ぶ一方、日本人街は貧しくみすぼらしかった。統一感のない町並みを見ながら、バードは「本当の日本へと入っていきたい」との思いを強くしている。



「日本的」な秋田にも文明開化の波は及んでいた。バードが訪れた師範学校は3階建ての欧風でバルコニー付き。五十嵐さんによると、日本人が模倣して建てた擬洋風建築だったという。西洋式の設備を導入していた秋田病院に外国人はおらず、日本人だけで運営されていた。絹織物工場は困窮士族の女性を雇用し、民営から県営に移行してから年々生産量が増加、従業員も増えていった。

秋田の町を巡ったバードは、ここを気に入った理由をこう記す。「まったく日本的な町である上に、衰退の兆候がないためである」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」より）

日本人の手で新たな技術の獲得や産業創出を目指していた秋田。戦禍に巻き込まれた旧城下町や貧しい農村を見てきたバードにとって、とりわけ輝かしく見えたのかもしれない。

© 2019 Akita Sakigake Shimpō